



用終 昔日趙州涉水時、親探深淺、定安危、用終靠倒  
一條杖、五百金剛不克移

曰ふを聞けば直ちに、「擒住して一掌を與へ、箇の野狐精と道つて便ち托開せん。」引とらへてビシヤリと横面を擲り飛ばし、此の野狐めと罵つて突放したであらうといふ、衲僧の境界は深淺を絶して居るから、拄杖を以つても何を以つても之を計ることは出来ぬ、それを探らう等とは奴を見て郎となし、知見解依の所得を以つて佛法を得たと自惚れて居る野狐の仲間ぢや、趙州であらうが南泉であらうが、遠慮は要らぬ、大いに擒住托開の惡辣な手腕を弄するが可いといふ見識ぢや、こゝらが狼玄樓といはれた所以で、佛向上の事を商量する時に當つては眼中佛祖なしといふ勢がある、「太勞生」大きに御苦勞様、それで茶羹和尚も浮ばれたであらうといひ、「亦拄杖を將つて壁に靠せて禮三拜して出で去らん」拙僧ならば拄杖を置いた上に叮嚀に三拜をして退きますと、風外老人は綿密の機用を發揮した、玄樓には玄樓の手脚あり風外には風外の面目がある、家風ばかりは師匠と弟子とでも全然同一といふ譯には行かぬ。

頌曰、昔日趙州涉水時、親探深淺定安危、用終靠倒

一條杖、可掛拾遺牌始得上五百金剛不克移、重多少○老僧賴伴歸無月村



【和訓】頌に曰く、昔日趙州水を渉る時、風無きに親しく深淺を探つて安危を定む、没溺も亦た用ひ終つて靠倒す一條の杖、拾遺の牌を掛け、始めて得べし。五百の金剛も移すこと克はず。重きと多僧頼ひに伴て無月の村に歸らん。

【頌】『昔日趙州水を渉る時』此の頌は趙州の用ひた拄杖を頌したのである、趙州は茶英の川を徒渉せられたが、七百甲子の老趙州といはれた程の大宗師家であるから電光影裏に玉石を分ち、擊石光中に縋素を辨ずるといふ様な機敏な力兩を具して居らるゝ、されば『親しく深淺を探つて安危を定む』川の深淺を測るに寸分の間違はなく、確かに行路の安全を保證せられる、斯様に學人の境界を見分け、對機之力兩を識別して醫者が病に應じて藥を與ふる様に接化指導せらるゝのであるから、參禪辨道には先づ正師家を選ぶといふことが肝要である、高祖道元禪師も學道用心集等に於いて懇々とこの事をお示しになつて居る、『風無きに波を起す』昔日趙州云々の著語ちや、水を渉るだとか水を探る等といふことは爲さずもがなの閑事業ちやと抑へ第二句の著語で、『没溺するも亦た知らず』趙州の保證等をあてにして佛法の大海を渉るは可いが、溺れても衲は知らぬぞと、これも玄機が趙州を讚揚すると反對に貶下した語ちや、師は擡げ弟子は捺へる、かくて公案が圓成するのである、『川

ひ終つて靠倒す一條の杖』趙州は茶英が者裏一滴の水無し云々といふを聞いて、我が務畢れといふ態度で拄杖を壁に靠せかけて置いてサツサと行つて終つた、併しその靠せかけた杖が問題ちや、『拾遺の牌を掛けて始めて得べし』叢林に於いては忘れ物のあつた時には拾遺の牌といふものを廊下の人の目の着く處に掛けて置く規定ちや、趙州が拄杖を忘れて行つたら茶英の會下では早速拾遺の牌を掛くべきちや、併し此の拾遺の牌は外の處へ掛けるのではないぞ、學人各自の胸に掛けて明け暮落し主を探すことが肝要ちや、『五百の金剛も移すこと能はず』金剛は最も力の強いもの、こと一人や二人でなく五百人も金剛力士が寄つても、趙州が置いて行つた拄杖は動かすことは出来ぬぞ、三世諸佛や歴代の祖師が八萬の大衆を指揮して掛つても此の拄杖はビクともすることではない、上は兜卒の頂より下は那落の底まで貫ぬいて居る絶大な拄杖ちや、思量や分別の力で動かぬは當然のことである、『重きこと多少ぞ』全體重さはどれ程あるかな、恐らく之を量り得る人はあるまい、『老僧頼に伴つて無月の村に歸らん』趙州和尚拄杖を忘れて來て嘸かし御不便なことでござらう、幸ひ拙僧が無月の村に御案門申しませうと擲擲して結んだ。



第四十八則 地藏佛法の話

地藏琛禪師因保福僧到傳奏琛問曰、彼中佛法如何、何不早示僧

曰、有時示衆曰塞卻汝眼使汝覷不見、眼見有塞卻汝耳使汝

聽不聞耳聞有坐卻汝意使汝分別不得意法有琛曰、吾問汝不

塞汝眼見箇甚麼見何不塞汝耳聞箇甚麼聞和不坐汝意

作麼生分別實知和尚向

【和訓】 地藏琛禪師因みに保福の僧到る、傳奏琛問て曰く彼の中佛法如何、何ぞ早く箇の

僧曰く、有る時衆に示して曰く、汝が眼を塞卻し汝をして覷れども見えざらしむ、

眼見什麼の 汝が耳を塞却し汝をして聴けども聞かざらしむ耳聞に什麼の 汝が意を坐卻して汝を

して分別することを得ざらしむ、意法に什麼の 琛曰く、吾汝に問ふ汝が眼を塞がす箇の甚麼

をか見る、和尚の面 汝が耳を塞がす箇の甚麼をか聞く、和尚の聲 汝が意に坐せず作麼生か

分別す、實に知る和尚の鬼窟裡 に向て活計を作すとを

【本則】 『地藏琛禪師、因に保福の僧到る』地藏琛禪師は立沙師備の法嗣で、初め雲居や雪峰に參

じ、宗一大師の法を嗣いでから地藏院に住し、又維漢院に住したから羅漢桂琛ともいひ、唐の天成

年間に遷化した、保福の從展禪師は雪峰義存の法嗣で長慶慧陵等とは法眷の間である、此の人も唐

の天成年間に遷化したから地藏琛と同時代の人であつたらしい、地藏の處へ保福の處から僧が來

た、「傳奏の官」傳奏の官等といふと如何にも尊敬した様であるが、實は此の飛脚めと輕蔑した意味

である、彼方の師家や此方の師家を訪ふて見識の取次をして居ても、自らは三文の所得も無からう、

一寸坐れば一寸の佛といふからその暇に少しでも打坐をすれば可いのにと警戒の意味が籠つた著語

である、「琛問ふて曰く、彼の中の佛法如何」保福の處では佛法をどう説いて居るかナと軽く挨拶を

せられた、笑裏に刀ありで、やさしい挨拶をしながら凝と僧の脚下を覗んで居る、却々油斷と隙も

あつたものではない、「何ぞ早く箇中の佛法を示さざる」その様な手ぬるいことをいはないで、擒住

するか托開するか、いづれにしても手取り早く向上の佛法を舉揚すれば可いのにといふ、「僧曰く、



或時は衆に示して曰く、汝の眼を塞却して汝をして覷れども見えざらしむ。僧は地藏和尚が良を説けて居るとは知らず、問はる、まゝに保福の第二第三底の平生の説法を持ち出して示した、實に家醜を外に揚ぐるの漢といふべきぢや、兎に角僧は正直に答へて、「保福和尚は時には座下に向つて尊公達の眼を塞いで終つて見えなくしてやらう」と申されるといつた、座下のものが眼根に映するもの爲に心を奪はれて常に第二念にはかり涉つて居るので、保福はそれを戒められたのであるが、それを地藏の様な宗師家の前へ持ち出されては保福が若し此の座に居つたならば穴にも入りたい程に思つたことであらう、此の僧實に師匠の顔に泥をぬるものといふべきぢや、「眼見什麼の咎があるか」眼は無心にして物の影を映す、何も塞却せられる様な罪はない、罪があるのは其の眼の持主ぢや、「汝が耳を塞却して聴けども聞えざらしむ」これも保福の語であるが、矢張此の様な處へ持ち出すべきものではない、大衆をして眼處に聲を聞くと云ふ没蹤跡の作略を會得させん爲の示衆であるけれども、此の僧には分らなかつたに相違ない、解つて居ればノコノコと地藏の處まで恥を曝しに來はせぬ、「耳聞に什麼の咎があるか」聞くのは耳の役で、何も咎はない、聲色裏に迷ふのが悪い、僧は更に語を繼いで保福の示衆を復習した、「汝が意を坐却して汝をして分別することを得ざらしむ」眼見

耳聞に咎があるのでなく、之に執着し之を分別する意根を坐却せねばならぬと、保福も順序を追ふて深より淺に向つて示されたものと見える、意を取り挫いで終つて分別が出来ぬ様にしてくれやう、それが最も學人の爲に肝要な手段であるといふ考ぢや、「意法に什麼の咎があるか」意根の外境に應じて働くのは木の葉の風の爲に搖れる様なもの、何も咎むべきことではないと抑へた、「珠曰く、吾汝に問ふ、汝が眼を塞がす箇の甚麼をか見る」僧が家醜を揚げるのを氣の毒には思つたが靜かに終まで聞いてから、地藏珠和尚は徐ろに接得せられた、保福は眼を塞がれたといふが、山僧はその様なことはせぬ、併し眼を塞がないでも尊公は何も見ることとは出来ぬ筈ぢや、色即是空であるから眼根に映するものは元來本體本性はない、本體本性なきものを認めて種々と分別妄想するまでのことぢや、「和尚が面を見る」風外老人が横合から僧に代つて答へられる、眼を塞がねば先づ第一に桂琛和尚の顔が見える、胡來れば胡現し、漢來れば漢現じて毫も映ます處はないといふたのぢや、併しこれは無心の往徠であるから其の地に到つた者でなくては斯様には答へられぬ、「汝が耳を塞がす箇の甚麼をか聞く」耳も塞ぐには及ばぬ、來るものを拒まずで、聞える聲は容謝なく耳に入れるこれが眞に眼見耳聞を超越した働ぢや、「和尚の聲を聞く」耳を塞がねば先づ聞えるものは和尚の聲



ぢや、併し風外に於いては聞いたまゝの聞き流して、恰も鳥飛んで跡なきが如く、聞いた蹤跡は少しも残らぬ、汝の意に坐せず、作麼生が分別す、意を坐斷する必要もない、意を坐斷せぬとて尊公達は何物も分別することは出来ぬ、通常の分別は水面の波紋の如く少しも蹤跡は残らぬから、分別といふても、實は本もなく末もないものである、されば意は思ふに任せ眼は見るに任せ耳は聞くに任せて置くが可いと、保福が把住門に立つて座下に垂示せられたのに對して、地藏は放行の作略を以つて僧を接得せられた、推倒と扶起と、手段こそ違へ、兩師家共に徹悞の慈悲を以つて學人の爲に眉鬚の脱落するを忘れての挖泥帶水である、實に知る和尚の鬼窟裡に向つて活計を爲すことを桂琛和尚巧みに僧を接得せられたが、併しそれも畢竟鬼窟裡の活計で、自由無碍の行履とはいはれぬ、我れと我が身を束縛するものといふべきぢや。

玄樓曰、門庭施設保福得之、入理深談可還他地藏若復如見  
 孔著檝者蓮藏海更有箇一著在見我任汝見那箇是汝眼、聞  
 我任汝聞那箇是汝耳、分別任汝分別那箇是汝意、和尙亦不欠一  
 根

○三人證之龜作龜

【和訓】

玄樓曰く、門庭の施設は保福之を得たり入理の深談は他の地藏に還す可し、若し復た孔を見て檝を著るが如きは蓮藏海更に箇の一著の在る有り、見ることは我れ汝が見るに任す那箇は是れ汝が眼、聞くことは我れ汝が聞くに任かす、那箇は是れ汝が耳、分別することは我れ汝が分別するに任す那箇は是れ汝が意。和尙も亦た一根を欠かす。

【評唱】

『玄樓曰く、門庭の施設は保福之を得たり』門庭の施設とは參禪學道の堂奥に達する途中、即ち門頭や庭前に於いて手段を施し方便を設くること、初心晩學の爲に卑近な説法をすることにかけては保福從展和尚は手慣れたものである、即ち五根を塞却して妄想妄念に心を亂さぬ様にといふ様な注意は先づ參學の初歩に向つてなすことで、それには保福は獨特の手腕を具してござる、『入理の深談は他の地藏に還すべし』佛向上の妙理に到入する深甚微妙の談は地藏桂琛和尚の御手のものである、還す可しは勝利は誰某の手に歸すといふ場合の歸すと同じ意味ぢや、桂琛和尚が扶起門の上から汝が眼を塞がす汝が耳を塞がすといふものは、所謂向上の作略であつて、堂奥に入つたものの爲にするのである、これ桂琛和尚得意の藝當ぢや、『若し復孔を見て檝を著るが如きは蓮藏海更に箇の一著の在るあり』地藏桂琛和尚が慣用の入理の深談は面白いが、更に一段深く、孔のある處



へ概を打ち込む様に、又所謂函蓋合し箭鋒柱ふといふ様に、對機の爲に最も適切な急所に當る垂示するといふことになる、此の蓮藏海にも面白い一手がある、「見ろことは我汝が見るに任す、那箇か是れ汝が眼、眼があつて見るのはお互の勝手ぢや、何も之を塞ぐの塞がぬのと論ずる資格は誰も持つて居らぬ、見たければ自由勝手に見るが可い、而し見た處でお前の眼がどれ程の力がある、白いものを黒くする譯でもなければ歪んだものを眞直にする譯でもなからう、又所對の境があるからこそ我が眼ぢやの我が耳ぢやといふが、見るものがなかつたら何が眼ぢや、別に眼といつて大切そうにするがものはない、眞暗の處でどの様な大きな目玉をきよろ付かした處で一向埒はあかぬ、色境があつての眼根ぢや、「聞くことは我汝が聞くに任す、那箇か是れ汝が耳、分別は我汝が分別するに任す、那箇か是れ汝が意」これも同じ道理で所知の境があるから能知の耳根や意根があるのである、善惡邪正の縁がなければ意根があつても分別は起らぬ、分別せねば意根ありと雖も無きが如しぢや、一切の諸法は元來能知所知を絶したものであつて、我々が時鳥の聲を聞いた刹那に於いては時鳥の聲といふ念もなく、之を聞く耳といふ念もない、即ち能所泯滅である、然るに聲とか聞いた我とかいふ第二念に涉つた時には已に時鳥の聲は求むるも得ることは出来ぬ、玄樓和尚の示された

一著は即ちこの能所泯滅の端的ぢや、「和尚も亦一根を缺かず」さう申さる、玄樓和尚自身も六根圓滿に具足して見たり聞いたりしてござるではないか、其の六根は全體何物でござるごとと逆に一擽を酬るた、「三人龜を證して鼈となす」いづれも得意らしく我見を並べて居るが皆龜を鼈と誤り奴を認めて郎となすのぢやと風外老人は引くるめて抑下せられた。

頌曰、出馬關山外、塞外將軍、運籌帷幄中、天子、狼烟絶來見、本無、各自有

成功、夢見、百戲

【和訓】頌に曰く、馬を關山の外に出し、塞外は籌を帷幄の中に運らし、寰中は狼烟絶し來りて見れば、本治亂、各自成功有り、夢に百戲を見る

【頌曰】「馬を關山の外に出し」「籌を帷幄の中に運らす」戰爭には第一線に立つて實戦に當る人と大本營に居つて謀を立てる人とが要る、軍士の孔明あれば勇將の關羽張飛あり、兩々相俟つて始めて勝利を得るのである、馬を國境の外に進めて盤虜と戦ふのは保福が門庭の施設をなす様なもの、神籌思策を大本營の帳の中にあつて立てるのは地藏が入理の深談をなす様なものぢや、或時は挖泥



帶水して下々の機を接し、或時は閉門打睡して上々の機を接する、機に應じ變に臨んで其の宜しきに從ふのであるから、いづれを是いづれを非と甲乙を定むべきではない、塞外は將軍、塞は國境のこと、國境の外に行つて夷狄を征するの將軍の役目である、「寰中は天子」寰中は畿内のこと、畿内の城に居つて命を四方へ傳へるのは天子の權である、それら其の務があつて相犯すことは出来ぬ、『狼煙絶し來り見れば』各自成功あり』狼煙は戰爭の時に狼の糞を燃して其の煙を見て合圖とするをいふ、狼煙が絶え戰爭が濟んで始めて、各其の本務に忠實であつた效あつてそれぞれ成功を收めて居つたことが分る、門庭の施設も入理の深談も、學人相手に機鋒を用ふる間は手ぬるいの何のといふもの、いづれ機根に應じての作略であつてそれ／＼本文の上から見れば功勳が現れて居る、『本治亂なし』元來治もなく亂もない、砲彈彈雨が收つて見れば怨親平等ぢや、それを敵といひ身方といふて争ふのは恰も「夢に百戲を見る」様なもので、實に多愛のないことである、一日賓主となるも終身是れ佛祖たらんことをと衆寮清規にも示されてあるではないか。

第四十九則 玄沙白紙の話

玄沙備禪師令僧馳書上雪峯欲疑殺峰上堂開緘見三幅白

紙問候乃呈示大衆曰、會麼開梨還良久曰、不見道君子千里同

風果然不能僧還舉似沙命漢沙曰山頭老漢蹉過也不識其父而有

【和訓】玄沙の備禪師僧をして書を馳せて雪峯に上らしむ大衆を疑殺峰上堂し緘を開て三幅の白紙を見る、問候乃ち大衆に呈示して曰く、會すや、開梨還良久して曰く、道ふことを見ずや君子は千里同風果然として之を僧、歸りて沙に舉似す君命を辱沙曰く、山頭老漢蹉過するも也た識らず、其の子あり

【本則】『玄沙備禪師、僧をして書を馳せて雪峯に上らしむ』玄沙師備禪師は雪峯義存の法嗣て、姓を謝氏といひ、壯年の頃まで漁士をして、謝三郎等と稱せられて居つたが唐の成通年間に一念發起



して佛門に入り、遂に宗一大師と號せられる程の大宗師家となつた、玄沙が或時座下の僧に書を持たせて師匠の雪峰の處へ走らせた、「大衆を疑殺せんと欲す」サア一山の衆の間に大問題となつた、和尚は何の爲に急使を出されたであらうかとは誰しも起す處の疑問であるけれども宗師家の作略は往々人の意表に出でるから容易に分るものではない、「峰上堂絨を開いて三幅の白紙を見る」師弟の間柄であるが禮儀は嚴格ぢや、雪峰は法堂へ集めて恭しく上堂して開封せられた、いづれ佛法上のことであらうと思つての用意ぢや、然るに中から三枚の白紙が出た、判じ物の様であるが全體何の意を寓したものであらうか、佛法僧の三寶の意か、法報應の三身の意か等と三といふ數に執はれては永劫に玄沙の意志を會することは出来ぬぞ、「問候親切」親切に師匠に對して時候見舞をせられた、感心なものぢやと揄擲したのである、「乃ち大衆に呈示して曰く、會すや」大衆にそれを見せて、サア玄沙和尚の手紙の意味が分つたかな、實に千言萬語を費した時候見舞の手紙が讀めぬ様では參視學道の效はないぞといふ警誡ぢや、風外老人は「閻黎會すや」雪峰和尚御自身は分つて居ますかなと脚下を睨む、「良久して曰く、道ふことを見ずや君子は千里同風と」座下の大衆は聲の如く啞の如くであつたと見えて、雪峰止むを得ず自問自答せられる、諸人者正月には千里同風といふ

纔將咫尺  
三尺紙幅  
探盡同腸  
風千里





が此處に書いてある文字もそれぢや、玄沙の處でも此の雲峰でも春來れば百花色を競ひ、秋來れば諸葉舉つて熟す、千里萬里同風光であるといふ意味が此の白紙の上に細々と記されて居ると示された、果然として之を讀むこと能はず」雪峰和尚果して讀めなかつた、千里同風等といふ様な平凡なことは書いてない筈ぢやと風外老人却々他を肯はぬ「僧歸つて沙に舉似す」玄沙座下から來て飛脚僧も雪峰の秀れた手腕を見て驚いたかそれとも何だこんな事かと思ひつたか、返事も貰はずに玄沙の處へ引退して行つて其の仔細を物語つた、君命を辱むるの漢「恰憫の漢ならば雪峰に一章を與へて其の妄想を誡めて來たてあらうに、此の僧千里に使して君命を辱しむるといふ鈍漢であつたのは惜いことぢやといふ」沙曰く、山頭の老漢蹉過するも也た識らず」三枚の白紙には千里同風等といふ様なことは書いてはない、もつとギリ／＼結着の佛法が擧揚してあるのに、雪峯の老僧はスリ違つても知らずにござる、昔はあの様でもなかつたが、此の頃は大部老耄せられたと見ると中で貶して心では褒めた、實に我が師匠ならではの様な作用は出來ぬ、何時もながら偉いものぢやといふ程の意味が含まれて居る、其の父にして其の子あり」師資證契即通、誠に呼吸が合つて居ると風外老人珍しく卓上の作略を用ひられた。

玄樓曰、雪峯依文解義玄沙依語生解、者箇因緣師資俱是錯  
雖然與麼錯時直須徹底錯普州人送賊

【和訓】玄樓曰く、雪峯は文に依て義を解し玄沙は語に依て解を生ず、者箇の因緣師資俱に是れ錯、然も與麼なりと雖も錯の時直に須からく徹底錯なるべし。普州の人 賊を送る

【評唱】「玄樓曰く、雪峯は文に依つて義を解し、玄沙は語に依つて解を生ず」雪峯和尚は三枚の白紙に迷つて千里ぢやの同風ぢやのと一言衆旨を曳くの譬の如く、一會の大家を惑はされた、玄沙も又僧の語を聞いて雪峯の作略に執着し、蹉過するも識らず等と憤氣になつて相手になつて居る、者箇の因緣師資俱に是れ錯」此の一場の出來事に就いて考へて見ると師匠の雪峯も弟子の玄沙も、共に錯つて居る、いづれも龜を證して龜と爲すぢや、然も與麼なりと雖も錯の時徹底錯なるべし」併し乍ら錯の時は徹頭徹尾錯でおし通すが可い、何でも徹底といふことが大切ぢや、慈悲妥協をするから物事が中途で有也無也になつて終ふ、勉強をする時は徹底勉強し、遊ぶ時は徹底遊び、茶の時は徹底茶、飯の時は徹底飯、これが眞に脱落の境界である、普州の人賊を送る」普州は賊の多い



處ちや、女樓が雪峯女沙を評せられるのは恰も普州の人が賊を送る様なもので、どちらも一筋縄の素物でないから、其のいふことを浮乎と表面から信用すると飛んだ目に遇ふぞ、徹底錯なるべし等と聞いて間違つたことを無理にも押し通すが可いのだ等と解するならば大變は見當違ひぢや。

頌曰、鞠養小兒令大了元來箇不孝鳥 卻成家賊困家嬢獅子兒能 纔將獅子兒能 尺紙三幅禮不東帛 探盡同風千里腸家醜

【和訓】 頌に曰く、小兒を鞠養して大ならしめれば、元來箇の不孝鳥 卻て家賊と成りて、家嬢を困す、獅子兒能獅子兒能 纔に尺紙の紙三幅を將て、禮は東帛にあらざれば則ち見れず、探り盡す同風千里の腸家醜

【頌】 「小兒を鞠養して大ならしめれば、却つて家賊となつて家嬢を困す」人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかなといふ歌の如く、親が子を愛する情は實に綿々密々筆紙にも盡せぬ程である、それ程の愛情があればこそ、幼にしては大小便の世話から長じては教育のことまで、骨を惜まず資力を惜まず、鞠養に力を盡すのである、然るにその子供が大きくなつて了へば、家の

爲父母の爲に盡すものは極めて稀で、多くは家賊となつて家の財産を持ち出して家嬢即ち母親を困らせる、雪峯も女沙を一人前のものにするまでには並大抵の苦勞ではなかつたが、而かも一山の主となつて了へば師匠の恩等はスツカリ忘れはて、三枚の白紙等を贈つて師匠を嘲弄する様な恩を讐の仕打をする、併し不幸な子程尙ほ可愛いとやらで、雪峯は其の白紙が餘程嬉しかつたと見えて、纔かに呎尺の紙三幅を將つて『探り盡す同風千里の腸』其の尺にも足らぬ三枚の白紙を珍重がつてこれで千里ぢやのこれが同風ぢやのと、離れた處に居る女沙の五臟六腑まで探られる、實に女沙は立派な不孝者になられたが、却々此の不孝者にはなれぬものぢや、見師に越えて正に傳授するに堪えたりといふが、雪峯以上の惡辣な機用を具して、師匠を點檢したり師匠を罵つたりする力倆を具したのを見ては、雪峯罵られ乍らも嬉しかつたに相違ない、諸人者果して立派な不孝者になる底の分があるかな、第一句の著語「元來箇の不孝の鳥」鳥は反哺の孝を知るといふが、我が女沙はその様なことは少しも知らぬ不孝鳥ぢやと抑へ、第二句の著語では「獅子兒よく獅子吼す」家嬢を困める様な獅子吼は女沙の如き獅子兒にして始めて出来る卓上した、第三句の著語「禮は束帛にあらざれば見す」問候とか朝參とかいふ禮儀は束帶幣帛を用ゆべきであるのに女沙は白紙三枚ぢや、實



に規矩を超越して居る、家醜外に揚ぐ、千里同風等と大衆の前で述べ立て、師資の間の恥を世間に曝した、併し其の家醜が誠に結構なもの、そのお蔭で眼を開いたものが雪峯玄沙の座下にもあらうが後世此の公案によつて開發するものは無數であらうと卓上して結んだ。

第五十則 義忠陸座の話

三平義忠禪師陸座、無風波戴角 出荒艸

有一道士出衆從、東過西畫棟朝飛 南浦雲

復有一僧從、西過東珠簾暮捲 西山雨

忠曰、適來道士卻有見處、師僧未

在海頭海頭黑、道士出作禮曰、謝師接引、食名 漢

忠便打東征西 夷恨、僧出作禮曰、

乞師指示愛利 漢、忠復打南征北 狄恨

復謂衆曰、箇兩件公案作麼生斷還

有人斷得麼、賞罰 分明、如此三問、叮嚀損君德 還 識背馬岱在 麼

衆無對、還較些子 〇海神 知貴不知價、忠曰、

既無人斷得、老僧爲斷去、便擲下拄杖歸方丈、諸仁者見義忠老麼 〇天下衲僧跳不出

【和訓】三平義忠禪師陸座、風波角を戴いて荒 草を出づる無し

一道士有りて衆を出で、東より西に過ぐ、棟 畫

復た一僧有り西より東に過ぐ、朝に飛ぶ 南浦の雲

珠簾暮に捲、忠曰く、適來の道士は卻て見處あり師



僧は未在藏頭白 道士出で、作禮して曰く、師の接引を謝す、名を食は 忠便ち打つ、東征す  
 夷恨海頭黒 僧出で、作禮して曰く、乞ふ師指示せよ、利を愛す 忠復た打つ、南征すれば 復た衆に謂  
 て曰く、箇の兩件の公案作麼生か斷ぜん、還て人の斷じ得る有りや、 賞罰 此の如く三び  
 問ふ、叮嚀は君徳を損す 還て 衆無對還て些子に較れり 海 忠曰く、既に人の斷じ得るなし 老僧  
 の爲めに斷じ去るといつて 便ち拄杖を擲下して 歸方丈、諸仁者義忠老を見るや

【本則】『三平義忠禪師陸座』三平義忠禪師は潮州大顛の法嗣で、潮州の師は夫の參同契の著者たる  
 石頭希遷である、義忠和尚が修行中には天神が来て食を送つたが、大顛に參じてからは和尚の境界が  
 進んだので最早天神の眼には見えなくなつて送食も出来なかつたといふ、佛向上の境界は精靈鬼神  
 も窺ふことが出来ぬのである、此の義忠和尚は或時法堂に於いて説法の座に陞られた、「風波角を戴  
 いて荒草を出づる無し」三平の様に風波を冒して荒草の中を出て来る底の恰悞の漢は少いと先づ卓  
 上した、「一道士あり、衆を出で、東より西に過ぐ」支那で儒佛二教に對して老子の教を奉ずる道教  
 の徒を道士といふたが、茲にいふ道士は其の意味ではなく、在家の士として道に志すものをいふた

のぢや、三平座下にもいづれ大勢の道士も參じて居つたことであらうが、此の道士は中に就いて特  
 に舊參のもので、いもあつたと見える却々侮り難い力倆を具して居る、何ともいはずに東序から西序  
 の方へ歩いて行つた、これが授けられた公案に對する所解であつたかも知れぬ、我が者裏佛法斯の  
 如しとでもいふた趣であらう、「復一僧あり西より東に過ぐ」道士の作處に對抗して一僧が西序から  
 東序へ移つた、一は道士、他は僧、一は東よりし他は西よりした、其處に味はうべき禪味がある、  
 之を風外老人は風流に形容して「畫棟朝に飛ぶ南浦の雲」珠簾暮に捲く西山の雨」と詠せられた、  
 美しく塗り飾つた棟のあたりを白雲の漂つて居る南浦の景色も面白いが、珠の簾を捲き上げて見る  
 模糊たる西山の雨も又一段の趣があると、道士と僧の作略をそれぞれ讚嘆せられたのである、「忠曰  
 く、適來の道士は却つて見處あり、師僧は未在」適來は先程とか先刻とかいふ意、師僧は僧に對す  
 る敬語ぢや、先刻の道士は確かに見處を具へて居るが、御僧はまだく、至らぬ節があるぞ、同じ様  
 な作略に對して甲乙優劣を着けた様な口振ぢや、電光影裏に緇素を分ち、擊石光中に龍蛇を辨する  
 といふ大機大用である、「藏頭白海頭黒」藏は馬祖道一の法嗣西堂智藏のこと、海は同じく百丈懷海  
 のことぢや、僧が馬祖に四句を離れ百非を絶して請ふ師某甲に西來意を直指せよと請ふと馬祖は今



日は疲れて居るから智藏に問へといひ、智藏は頭痛がするから懐海に問へといふ、懐海は某甲不會、そんなことは衲には解らぬといふたのだ、僧は更に其の旨を馬祖に復命に及ぶと、馬祖は藏頭は白海頭は黒といはれた、三平の作略は恰どそれに似て居るといふ評ぢや、「道士出で、作禮して曰く、師の接引を謝す」道士は印可せられたと思つて早速御禮を言上した、接引は接得引導の意ぢや、「名を食るの漢」自性の微見が出来たか出来ぬかは自分でも知れるに、此の道士は師家の印可さへ得れば可いと思つて居る、名さへあれば其の實の有無は構はぬといふ輩ぢやと抑へて、「忠便ち打つ」義忠和尚は道士が得意になつた鼻を挫いた、從東過西といふ一物を珍重して居るのを奪ひ去る爲の一掌である、「東征すれば西夷恨む」東の道丈を接得すれば西の師僧が恨む、一方立つれば他方が立たず、兩方立つれば身が立たぬぢや、「僧出で、作禮して曰く、乞ふ師指示せよ」私を未在と評せられたが何いふ理由でござるか、佛法的々の意旨を示して戴きたいと不平満々たる様子で進んで来た、僧は未在と有見處との二頭に涉つて居るから不平が起るので、其處が脚下未穩在なる證據である、僧は道士とは違つて所謂「利を愛するの漢ぢや」印可よりも實際の力倆を充分に具せんとするのである、「併し名利共に之を貪り之に愛着するのは眞固の道人とはいはれぬ」「忠復打つ」義忠和尚は僧





の撃縛もついでに斷じてやらうといふ慈悲から又一掌を與へられた。「南征すれば北狄恨む」いづれへ偏つても中正は保たれぬ、忠ならんと欲すれば孝ならずであるが、此處で禪機を弄して東西南北を躡跳するといふ作略が必要ぢや、「復衆に謂つて曰く、兩件の公案作麼生か斷ぜん、還つて人の斷し得るありや」義忠和尚は一通り兩人を接得して於いて、サテ大衆に向つて、此の公案何と裁いたものであらうか、吾れこそ之を斷じ得るといふ自信あるものあらば出て來れといつてヂツと見渡した、道士に對するの僧に對するの皆一會の大衆を相手にしての大公案であつたが、一人として破顔微笑するものもなかつたと見えて、「此の如く三び問ふ」和尚は同じことを三度まで繰返された、「賞罰分明」作略の是非勝敗は分明なものぢや、殊更に大衆を煩して斷ぜしめるにも及ばぬ、「叮嚀君徳を損す」餘り叮嚀すぎると却つて價值がなくなる、「還つて背腸に馬岱在るを識るや」三度問ふのは餘計なことである、背腸に馬岱あるが如くである、「衆無對」大衆一同一言も發することが出來なかつたのはどうしたもので、聲の如く啞に似たりでは折角佛飯を費した甲斐が無いではないか、「還つて此子に較れり」無對が可い、達磨も武帝に對して不識と答へ、維摩は文殊に對して默然として一語もなかつた、物言へば唇寒し秋の風ぢや、「海神貴きを知つて價を知らず」海神は珊瑚の貴さ

を知つて居つても世間の市場に於ける價は分らぬ、有難いとは思つて無眼子共には佛法の價は分るまい、「忠曰く、既に人の斷し得る無し、老僧爲に斷し去るといふて、便ち拄杖を擲下して歸方丈」果然として電飛び雷鳴るが如き大機大用を現せられた、斷するものが無ければ止むを得ぬ、山僧が一刀兩段に葛藤を斷ち截つてくれやうと、拄杖を擲け出して置いてサツサと方丈に歸られた、どうして之が公案を斷したことになるか、思量や分別では和尚の眞面目に相見することは出來ぬ、一切の葛藤を拄杖に托して其處に擲け出し、空手にして室に歸られたのである、空手の處に歸方丈の作略あり、無一物の處無盡藏ぢや、「諸仁者義忠老を見るや」サア我が風外座下の諸人者三平義忠和尚の手許が解つたか、「天下の衲僧も跳不出」此の大綱は天下の衲僧と威張つて居る伶俐の漢と雖も跳ひ出すことは出來ぬ、跳出し得るならば眞に従東過西、從西過東、いづれも自由自在である。

玄樓曰、道士鳶飛戾天、這僧魚躍于淵、雖然天淵異、要且彼此各有從容處、爲甚麼一箇具見處、一箇未在、謝接引乞指示、因甚麼一向打著、如擲下拄杖去、那裏是判斷處、會麼、唯



知夏季極熱誰識仲冬嚴寒和尙還議慶○老老大大

【和訓】玄樓曰く、道士は鳶飛んで天に戻りこの僧は魚淵に躍る、然も天淵異りと雖も要且つ彼此各従容の處有り、甚麼としてか一箇は見處を具し一箇は未在なる、接引を謝し指示を乞ふ、甚麼に因てか一向に打著す、拄杖を擲下して去るが如き那裏是れ判断の處、會すや、唯だ夏季の極熱を知て誰か仲冬の嚴寒を識らん。和尙還て議るや○老老大大とし

【評喝】「玄樓曰く、道士は鳶飛んで天に戻り、この僧は魚淵に躍る」道士が東より西に過ぎたのは鳶が高く飛んで天に届くかと思はれる様なもの、僧が西より東に過ぎたのは魚の淵に躍る様なもので、それ／＼其の自分を發揮したまでのことぢや、山は高く屹え、水は低きに着く、一切萬物皆其の分に應じて活動して居る、然も天淵異りと雖も要且つ彼此各従容の處あり、天と淵と、其の居る處行く處は異つて居るけれども、いづれも従容と落ち着き拂つて其の境界に甘んじて居る、然るを「甚麼と爲てか一箇は見處を具し、一箇は未在なる」と玄樓和尚は義忠和尚が一手擡一手捺の作略を用ひられたのを詰つた、つまり玄樓和尚は兩者共に與へた方面から論じたのであるから義忠和尚が

一揚一抑せうれたのに對して一應不審を打たれたのぢや、「接引を謝し指示を云ふこと甚麼に因つてか一向に打著す」道士が接引を謝して禮拜しても之を打し、僧が指示を乞ふても之を打したのは先の作略とは異つて一等に兩人を貶下したのであるが、これ又どういふ意旨であらう、併しそれ等は不審といへば不審であるが時に應じ機に従つて用ひた接化の手段と見れば可いとして「拄杖を擲下して去るが如きは那裏是れ判断の處」最後に自ら判断を下すといひながら別に判断らしいことも曰はずに拄杖を擲け出して置いて歸方丈したのは何した譯ぢや、どうしてそれが判断であるか「會すや」サア諸人者此處の道理が分つたかな、斯う問はれたからとて小首を傾けたり思案した處で分る譯のものではない、下手の考休むに似たりぢや、恰憫の漢ならば、直ちに玄樓の胸倉を取つてねち伏せる處ぢや、「唯夏季の極熱を知つて誰か仲冬の嚴寒を知らん」これが玄樓の判断ぢや、土川後に寒の前といふて、暑さは夏季即ち土用後が烈しく寒さは寒前から寒の入りが嚴しい、其の夏季の暑さは誰しも知つて居るが仲冬の寒さは何人も知らぬといふ、暑さが分つて寒さが分らぬとはどういふ譯ぢやと第二念に涉れば最早マンマと玄樓和尚の良に掛つたのぢや、玄樓は此の句裏に轉身の妙機を會するもの、出で來らんを待つたのである、「和尙還つて識るや」老和尚御自身は判断處が



分つて居ますかな、如何にも悟つたらしく唯季夏の極熱を知つて云々と申されるがそれは「老々大々として第二に落在するも亦知らず」ぢや、第二頭に落在して居るといふことを好い老和尚の僻に分らぬとは情ない、苟も言端語端に涉れば凡てこれ第二第三ぢや。

頌曰、恨徹全身封雍齒風搖南岸、淚霑雙袖斬丁公雨打北池、這般賞

罰豈由實計不厭偽、都出權謀術數中莫妄想○有誰

【和訓】頌に曰く、恨み全身に徹して雍齒を封じ、風南岸の柳を揺らし、淚雙袖を霑して丁公を斬る、這般の賞罰豈實に由らんや。計は偽り、都て權謀術數の中を出づ。莫妄想○誰有つてか深意を知る

【頌】「恨全身に徹して雍齒を封じ」前漢の高祖は天下を平定してから張良の勸によつて雍齒を封じた、それは高祖の臣下が、始めから随つて居つた者や特に高祖に愛せられたものは高祿に封せられてあらうが然らざるものは業成つてから重く用ひられず、中には却つて誅せられるであらうと疑つて意を安んぜなかつたので、高祖は自分と平生最も仲の悪かつた雍齒といふものを高祿を以つて封じて賞罰の公平無私なるを示した、諸臣は之を見て大いに安堵し、高祖の爲に益忠勤を抽でたと

いふ、これ義忠和尚が道士を肯つて見處ありといつたことに譬へた、義忠の判断も又公平で、恩怨によつて和するようなことはない、「淚雙袖を霑して丁公を斬る」丁公は沛の人で高祖とは同郷の出身であるが、此の人は高祖の敵方である所の項羽の身方となつて高祖と戦つた、高祖の軍が敗れて彭城の西へ逐ひ込められた、其の時の敵將は即ち丁公である、高祖は丁公に向つて同郷の誼を以つて見遁せと言ふたので丁公は兵を引き擧げて終つた、其の後項羽が滅びて天下が高祖の手に歸した時、丁公は高祖に謁見した、昔の恩誼に感じて優遇するとも思つたのであらう、然るに高祖は丁公を軍中へ引き出して臣下に向つて其の罪を發表した、丁公は項羽に仕へて忠義ではなかつた、丁公が昔自分を免した爲に項羽は遂に亡びたのである、これ臣となつて其の君の爲に徹底忠義を盡さなかつたものといふべきであるといふて遂に丁公を斬つて終つた、これ臣下をして二心を懐かしめぬ爲の手段であるが、高祖は定めし雙袖を涙に霑したことであらう、義忠和尚が僧を未在と抑下したのに譬へたのである、「風南岸の柳を揺がし」雨北地の蓮を打つ」彼も一時、此も一時、柳の風速の雨それ々に趣があつていづれを是いづれを非と定むる譯には行かぬ、「這般の賞罰豈實に由らん」雍齒を封じたのも丁公を斬つたのも、實に功罪に由つた譯ではない、道士に見處の功あるに非ず、



僧に未在の罪があるのではない、「計は偽を厭はず」計略は時には他を偽ることも止むを得ぬ、宋襄の仁を以つて餘り挖泥帶水すると却つて眉鬚墮落の憂目を見る「都て權謀術數の中に出づ」賞罰も褒貶も爲人の手段であつて都て權謀術數から割り出したことであるから、是が是でなく非が非でない、此處が禪家と兵家との共通した處ちや、而し兵家の事は多くは私利私慾に基づくが、禪家の作略は常に公明正大、毫も偏見偏執を免さぬ「妄想すること莫れ」禪家と兵家とを比較すると兎角世人は誤つて妄想する「誰有つてか眞意を知る」大宗師家の眞意は其の境界に到つたものでなくては分らぬ、高祖の心中は高祖の外に知るものなく、義忠の的意は只義忠知るのみである。

鐵笛倒吹講話上卷終

大正九年十一月五日印刷  
大正九年十一月十日發行

定價參閱

不許複製  
鐵笛倒吹講話  
上卷

講述者	日置默仙
編者	池上文俤
發行者	增田義一
印刷者	渡邊八太郎

印刷所 日清印刷株式會社

發行所

實業之日本社

東京市京橋區南紺屋町十二番地  
電話八七四、八七五、八七六、八九九、四九四三  
郵便振替貯金口座東京三二二六番



▽前永平寺管長 日置默仙禪師述

# 鍊 膽 術 廿八版

▽定價六十五錢  
▽郵稅四錢三六判  
▽總クローヌ製

膽成る所、其處に大智略出で、大勇氣起り、大人格大威嚴備はり、事に處して泰然自若、現世の境を超脱し、有ゆる煩悶妄想を立處に一掃す。默仙禪師本書に於て鍊膽の法を説くこと頗る切なり。

□碧巖錄講話全二册再版 高津柏樹師著 定價各二圓五十錢 郵稅各十二錢

□無門關講話再版 菅原時保師著 定價二圓五十錢 郵稅十錢

□縮修 養 七十五版 法、農學博士 新渡戸稻造先生著 定價一圓五十錢 郵稅六錢

□縮世渡りの道 三十八版 法、農學博士 新渡戸稻造先生著 定價一圓五十錢 郵稅六錢

□自警 十一版 法、農學博士 新渡戸稻造先生著 定價二圓 郵稅十六錢

□一日一言 五十二版 法、農學博士 新渡戸稻造先生著 定價八圓十錢 郵稅四錢

□大國民の根柢 三版 實業之日本社長 増田義一著 定價一圓八十錢 郵稅十錢

□縮青年と修養 二十二版 實業之日本社長 増田義一著 定價一圓五十錢 郵稅八錢

□生活戰術 十版 法學博士 浮田和民先生著 定價一圓五十錢 郵稅六錢

□奮闘主義 十版 男爵 森村市左衛門翁述 定價一圓二十錢 郵稅八錢

□努力 力六版 男爵 大倉喜八郎翁述 定價一圓 郵稅八錢

□意志の力 十二版 安田善次郎翁述 定價六十五錢 郵稅四錢

□新しい主義學說の字引 新刊 勝屋英造先生著 定價三圓 郵稅八錢

□新しい言葉の字引 四十二版 服部嘉香先生 植原路郎先生共著 定價一圓 郵稅六錢

□常識知らぬと耻 十六版 樋口麗陽先生著 定價一圓 郵稅六錢

□縮社會と自分 二十版 夏目漱石先生著 定價一圓五十錢 郵稅十錢



□民衆と宣傳新刊	加藤咄堂先生著	定價二圓八錢
□國際聯盟の解説再版	法學博士 蜷川 新先生著	定價一圓二十錢
□改造の歐洲より再版	加藤直士先生著	定價二圓五十錢
□世界改造の人々三版	伊藤圭一郎先生著	定價一圓三十錢
□祖國を顧みて十四版	法學博士 河上 肇先生著	定價一圓二十錢
□開國大勢史三版	侯爵 大隈重信閣下著	定價五圓
□易の原理と其應用五版	法學士 細貝正邦先生著	定價一圓三十錢
□性慾研究と精神分析學十四版	醫學博士 神保三郎先生著	定價二圓
□一般性慾學近刊	醫學博士 羽太銳治先生著	定價未定
□性慾と近代思潮新刊	醫學博士 羽太銳治先生著	定價二圓

□海	八七版	島崎藤村先生著	定價壹圓三十錢
□家庭靈	鐘全二冊四版	小杉天外先生著	定價各三圓廿錢
□家庭小説	笛全二冊十二版	小杉天外先生著	定價各二圓
□修訂法	難五版	文學博士 坪内遙道先生著	定價二圓三十錢
□名作物	語近刊	加納幽閑子女史著	定價未定
□日蓮上人聖地巡禮三版	一高澗洽會編		定價一圓五十錢
□書畫鑑賞と鑑定の仕方三版	今泉雄作翁著		定價四圓
□實用能書	術十三版	文部省囑託 西脇吳石先生著	定價七十錢
□作文範書簡文大	全六版	文學士 高木尙介先生著	定價十六圓
□淨瑠璃に現はれた女	情操四版	島中雄三先生著	定價一圓八十錢



□ 野球 ローマン人再版 小泉葵南先生著 定價九十五錢  
 □ 校歌 ローマンズ十版 出口 競先生著 定價七十五錢  
 □ 續校歌 ローマンズ三版 出口 競先生著 定價一圓  
 □ 時事應用 活きた英語獨習六版 長谷川 康先生著 定價一圓五十錢  
 □ 英語熟達 ノート三十七版 實業之日本社編 定價六十五錢  
 □ 國史美談 全三冊 二十三版 東京高師助教授 北垣恭次郎先生著 定價各一圓五十錢  
 □ 俳句とはどんなものか 二十二版 高濱虛子先生著 定價七十錢  
 □ 俳句の作りやう 二十二版 高濱虛子先生著 定價六十五錢  
 □ 安價節約 新生活法四版 醫學博士 額田 豊先生著 定價一圓三十錢  
 □ 心得て居らねばならぬ 社交禮法六版 別府熊吉先生著 定價一圓二十錢

□ 複利増進 資金運用論 三十二版 前關西學院教授 興相李太郎先生著 定價九十二錢  
 □ 經濟記事の讀み方 五十三版 法學士 細貝正邦先生著 定價一圓  
 □ 投資物の比較研究 十一版 法學士 小川鐵堂先生著 定價一圓二十錢  
 □ 株式市價の經濟的研究 八版 木下 茂先生著 定價一圓七十錢  
 □ 株券利殖は此の呼吸で行け 再版 ドクトル・オヴ・エコノミクス 野中 正先生著 定價二圓  
 □ 稻作改良增收法 再版 農學士 岡村猪之助先生著 定價一圓五十錢  
 □ 最も利益の多い 此れからの養鶏 再版 中村八郎先生著 定價二圓  
 □ 日本人の南米事情 九版 南米ヘルシ領事秘書 富田謙一先生著 定價八十錢  
 □ 野菜十坪菜園近刊 農學士 岡村猪之助先生著 定價未定  
 □ 改訂 岡田式靜坐法 百十一版 實業之日本社編 定價七十錢



トエ7F-10

# □ 英傑傳叢書 □

第十二編	第十一編	第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
少	グ	ネ	リ	カ	フ	ナ	ペ	ク	ル	ビ	ワ
ピ	ラ	ル	ン	ヴ	レ	ポ	ー	ロ	ー	ス	シ
ツ	ツ	ソ	コ	ー	デ	レ	ト	ン	テ	マ	ン
ト	ド	ン	ル	ル	リ	オ	ル	ウ	ル	ル	ト
未	ス	未	ン	再	キ	ン	再	エ	品	ク	ン
刊	ト	刊	三	版	再	三	版	再	切	四	四
永井柳太郎先生著	未刊	平沼法學博士著	版	阿部秀助先生著	版	長瀬鳳輔先生著	昇	版	絶	版	版
	小山東助先生著	内ヶ崎文學士先生著		煙山文學士著		長瀬鳳輔先生著	曙夢先生著	戸川秋骨先生著	田村	蜷川法學博士著	井上代文學士共著
								勤先生著			

菊 判 總 布 菊 判 總 布  
 函 入 大 冊 函 入 大 冊  
 □ 全 部 二 十 卷 □  
 定 價 各 冊 二 十 圓  
 郵 稅 各 冊 二 十 錢



終